あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生の直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第84回

Code for Japan Summit 2018を終えて

●Code for Japan 関 治之（せき はるゆき） Twitter @hal_sk

9月22日～24日にかけて、Code for Japanの年次カンファレンスである、Code for Japan Summitを開催しました。第5回目となる本サミットは、新潟で行いました。会場となった新潟国際情報大学様、ありがとうございました。昨年のサミットは神戸市で700名の参加者が集まりましたが、今年も同様に2日間でのべ700名の参加者に来ていただきました。

多様な人たちがテクノロジ活用について語る2日間

Code for Japanのサミットは、一般的なテックカンファレンスと似たところもあれば、違うところもあります。テックカンファレンス同様、ライトニングトークやワークショップ、アンカンファレンスなどもありますし、ブースもあります。セッションは複数トラックに分かれており、参加者は自由にセッションを聞くことができます。

違う部分は、なんといっても参加者層でしょう。技術者以外の人も多く参加します。とくに、自治体や政府関係者も多く参加しており、セッションを持ったりしているところは大きな違いです（**写真1**）。

▼写真1　集合写真

多様なセッション群

私たちCode for Japanは、技術を使ってさまざまな課題を解決したいと思う人たちのコミュニティです。技術を活用して課題を解決するには、技術以外の要素も重要になってきます。取り組むべき課題を見つけるには、行政側の視点も必要ですし、NPOなどの団体がどのような活動をしているかも知る必要があります。また、地域の人たちから、自分の住んでいる場所についての歴史や課題、展望などを聞くことも大事です。

多様な人たちが参加する場で、テクノロジの可能性を語り合うことが最も重要なのです。たとえば、以下のようなセッションがありました。

●Becoming a Civic Service Designer

元Code for Americaのフェローでもあるアリエル・Kennanさんは、ニューヨーク市長の下サービスデザインチームを率いて国内初の地方自治体サービスデザインスタジオを設立し、人間中心デザインを推進してきました。このプレゼンテーションでは、デザイン文化を構築するために役立つ、世界各地の事例やリソースを紹介し、市民サービスデザインのアイデアについて紹介いただきました。

●朝まで生テレビ風の激論！デジガバ担当者の本音曝（さら）します

経済産業省のIT室のメンバーが主催のセッションです。「政府のデジタル・トランスフォーメーションに乗り出す」ために、まずは「隗（かい）より始めよ」ということで、経産省は『DXオフィス』を設置しました。その担当者をパネラーとして招き、DXオフィスの目指す行先と、取り組みの詳細、直面している課題について、本音を交えて激論するパネルディスカッションでした。

●バスデータ（GTFS）整備から考える専門家？地域の協働

地域の交通を良くしたい、Google Mapsでバスを検索したい、オープンデータで何かしたい、と考えるCode for“Area”的な活動として、バス業務システム、乗換検索、交通データ分析、国交省OBなどの専門家と、国交省や大手事業者を巻き込みながら全国を飛び回るメンバー、そして地域のCode forメンバーによる連携コミュニティ「標準的バス情報フォーマット広め隊」が生まれており、バスオープンデータ（GTFS）整備が急速に進んでいます。

地域と専門家が協力して世の中を良くしていく事例や方法について語られました。

●バッドオープンデータ供養寺

世の中のバッドオープンデータが二度とこの世を彷徨（さまよ）わないように、「供養（データクレンジング）」する方法を考える場。データの公開に携わる行政職員の方や、データを利活用するエンジニア・データサイエンティストが集まり、より使いやすく品質の高いオープンデータの公開と加工のしくみを考えていくために建立されました。

前半はパネリストが、日頃の業務の中で、どのようなバッドオープンデータに遭遇し、それらにいかに対処してきたか、実例やクレンジング技術を紹介。後半では事前投稿されたバッドオープンデータを紹介しながら、オーディエンスのみなさんと一緒に成仏させる方法を考えました。

●シニアがプログラミングすると世界が変わる！

今年の2月ごろ、国連総会で日本人のおばあさんがプログラミングについてスピーチをして話題になりました。スピーチをした若宮正子さんにプログラミングを教えていた小泉さんは「シニアプログラミングネットワーク」という会を主催しており、プログラミングを学ぶシニアのみなさんの支援をしています。

今回は、若宮さんと同じく82歳にしてアプリを何本もリリースしている鈴木富司さんも登壇しお話を聞きました。シニアがプログラミングを学び続ける意義とは何か？　新しいことにチャレンジするシニアを応援するセッションです。

●データ利活用研修データアカデミーの全て

Code for Japanが自治体向けに展開している、新しいデータ利活用研修「データアカデミー」のすべてを紹介。データ分析だけでなく、各自治体が持っている課題から仮説を立て、必要なデータを考え、分析し、評価・政策立案、費用対効果を分析するメソトロジーがどのように自治体で活用されていくか、事例を交えながらディスカッションしました。2017年度データアカデミー研修(11自治体)、2018年度データアカデミー研修、データアカデミー・エッセンス(東京・新潟)に参加している20を超える生きた事例が話されました。

◆ ◆ ◆

どうでしょうか。タイトルだけでも多様さがわかるのではないでしょうか。各地で活動しているCode forのメンバーの発表はもちろん、自治体や政府の公務員主催のセッションもありますし、学生チームによる発表もあります。各セッションのほとんどは、公募で集まっています。

さて、ここからはその中から3つのセッションについて紹介します。

Becoming a civic service designer ～サービスデザインを学ぶ～

「サービスデザイン」という言葉を知っている方も多いと思います。ユーザのニーズから、サービスが生まれるプロセス自体を再設計していく「ユーザ中心設計」の1つの方法論です。

Ariel Kennanさん(**写真2**)は、大学で人間中心デザインを学び、Code for Americaでフェローとして自治体の中で働く経験などを経たのち、ニューヨーク市長の下サービスデザインチームを率いて国内初の地方自治体サービスデザインスタジオを設立、行政の中で人間中心デザインを推進してきました。

日本政府もサービスデザインによって行政サービスを改善していくべきだと考えており、内閣官房からガイドラインも提示しています。

Arielさんの講演の中では、サービスデザイナーは、形や見た目をデザインする人ではなく、物事がどのように動くかをデザインする役割だという話が最初にありました。ホームレスに対して家を提供するプログラムの改善のため、政策を変更したり、レポートを作ったり、データを使ってパフォーマンスを計測するしくみを作ったり、コミュニケーション戦略を作ったり、見回りを行う職員のジャケットをリデザインしたりといった活動を行った結果、1年間で690名以上のホームレスに家を提供できるようになりました。また、聴講者に向けて、「誰でも市民サービスデザイナーになれるし、どう設計したらいいかを自治体に対してサポートする側にもなれる」ということを言っていました。また、そのようなスキルを身に付けるためのさまざまなツールを紹介してくれました。

- Civic Service Design Tools + Tactics[注1]
- IDEO Design Kit[注2]
- Center for Civic Design Election Tools[注3]

しかし、最も重要なのは実践であり、行政の人々と一緒に課題について話し合いをする場です。ワークショップや、Civic Usability Testing Groupsなどの取り組みを紹介してもらいました。そして、そのあとのプロセスとして、ジャーニーマップを作り実際にステークホルダーとともにサービスを改善していくプロセスについて解説してくれました。

最後に、組織の文化を変えるのに有効ないくつかの戦略について教えてくれました。

▼写真2　Ariel Kennanさん

注1　http://nyc.gov/servicedesign101
注2　http://www.designkit.org/
注3　https://civicdesign.org/

- ミッションやプリンシパル（規範）を共有する
- 優秀かつ多様なチームを組織する
- 作業を公開する
- ドアを開き、誰でも相談をしに来られるようにする
- わかりやすい言葉で伝える
- デザインに関する調達障壁を低くする

スライドはSlideShareにあります[注4]ので、興味がある方はぜひご覧ください。

バスデータ（GTFS）整備から考える専門家×地域の協働～バス情報フォーマットを広めたい～

みなさんは、GTFSというフォーマットを知っていますでしょうか。これは、General Transit Feed Specificationの略で、バス停やバスの時刻表、駅の時刻表などに関する情報の世界的な標準化フォーマットです。日本でも、これをベースにしたフォーマットが、国土交通省指定のバス時刻表フォーマットになっています（標準的なバス情報フォーマット：GTFS-JP）。

このフォーマットに対応しておくと、Google MapsやYahoo!といった事業者の乗り換え案内に情報が表示されるようになるほか、GTFS対応アプリからもデータを利用できるなど、他地域との比較や情報分析などもやりやすくなります。

このセッションでは、国土交通省のバス時刻表フォーマットへのGTFS採用の牽引役となった東京大学の伊藤昌樹先生を始めとする、「標準的なバス情報フォーマット広め隊」というコミュニティのメンバーと、広め隊との連携によって実際のデータ作りに協力をした各地のCode forのメンバーが登場し、地域でのバス情報事情や、地域のCode forコミュニティと専門家の協働による課題解決の方法について話し合われました。実際に、富山県南砺（なんと）市のCode for Nantoや、富山県富山市のCode for Toyama Cityのメンバーは、広め隊と一緒に事業者のデータ作成をサポートしています。

バス事業者というのは、鉄道会社とは異なり規模の小さい事業者がたくさんいるのが特徴です。平成27年度の時点で、バス協会には2,217の事業者が登録しており、そのうち56.3％が、従業員が10人以下、7割以上が赤字で運営しています[注5]。

IT化に投資をする体力がなく、そもそもGTFS対応を行うようなスキルを持つ人が少ないという状況の中で、広め隊の専門性と、各地のコミュニティが連携し、自治体や事業者とともにデータ作りを進めていくやり方は、今後の地域課題解決の可能性を示すものでした。

バッドオープンデータ供養寺～使いにくいデータを成仏させる～

サミットの中でも人気コンテンツだったのが、バッドオープンデータ供養寺（**写真3**）。PDFやセル結合が入ったExcelファイルといった、マシンリーダブルでない使いづらいオープンデータを皆で持ち込み、エンジニア（住職）が加工して使いやすく（お焚き上げ）しつつ、使いやすいオープンデータについて語るというセッションでした。

真面目な内容をおもしろくする、こういった工夫もシビックテックの醍醐味ですね。

いかがでしたか？　たくさんのセッションがある中、一部しか紹介できませんでしたが、魅力の一端でも伝わっていれば幸いです。来年のCode for Japan Summitでお会いしましょう！ SD

▼写真3　バッドオープンデータ供養寺の住職

注4　https://www.slideshare.net/mobile/arielmai/becoming-a-civic-service-designer

注5　日本のバス事業とバス協会の概要より：http://www.bus.or.jp/about/pdf/h29_nba_brochure.pdf